貝原益軒『大和本草』の漢方を読む
中国古典書への傾倒と自立化

矢嶋道文 著

大空社出版　2026 年 3 月 5 日発行
A5 判・上製・xiv+407 頁　978-4-86688-247-5　定価（本体 4,300 円＋税）

本文見本



行をクリックでページにジャンプ

ページ	内容［本書ノンブル］
1 ～ 5	はじめに［*i, v–viii*］
6 ～ 8	目次［*xii–xiv*］
9 ～ 14	貝原益軒略年譜［*1–4, 8, 9*］
15	訳出箇所対照表［*50*］
16, 17	第 1 章　自序［*57, 59*］
18, 19	第 2 章　凡例［*61, 62*］
20, 21	第 3 章　本草の書を論ず［*75, 76*］
22 ～ 24	第 4 章　薬を用いるの論［*93*］ 薬名弁疑［*150*］　本邦誤用薬品［*162*］
25, 26	第 5 章　薬類［*197, 198*］
27 ～ 29	第 6 章　薬木［*269–271*］
30 ～ 35	中日医薬学・漢方比較年表 ［*359, 360, 377, 378, 380, 381*］
36	索引［*407*］
38	著者紹介

はじめに

貝原益軒『大和本草』は、晩年七九歳（以下、数え年）の宝永五年（一七〇八）に稿が成り、翌六年、本巻一六巻の刻本が刊行、没後の正徳五年（一七一五）『附録』二巻および『諸品図』三巻の成立をみた。同書成立の背景には、中国・朝鮮における医薬学の発展と日本におけるその受容・発展の歴史、とりわけ、江戸期における中国書の渡来と和刻本の目を見張る急増があった（本書巻末「中日医薬学・漢方比較年表」を参照して頂きたい）。同時にまた、『大和本草』は元禄期（一六八八～一七〇三）における文化の発展といった好環境のもとに成立したといえるのである。

最初に、益軒とその『大和本草』へ至る道を、「益軒先生伝」（益軒会編纂『益軒全集』巻之一所収。以下『伝記』とし引用頁を示す）を主な資料として、簡単にたどってみたい（後掲「貝原益軒略年譜」も参照願いたい）。

「益軒先生、名は篤信字は子誠、久く損軒と号せしが、晩に更めて益軒と号す。〔…〕明正天皇の寛永七年十一月十四日〔一六三〇年一二月一四日〕を以て福岡城中の東邸に」生れ、この年は、「林羅山は四十八歳、将に聖堂を忍岡に建てむとし、石川丈山は四十七歳、遊んで山陽の風月に嘯傲し、松永尺五は三十八歳、猶ほ加賀の前田氏に仕へ、中江藤樹は二十三歳、伊予の大洲にあり。山崎闇斎は十三歳、木下順庵は十一歳、熊沢蕃山は十歳、伊藤仁斎は四歳〔…〕。〔新井〕白石は後るゝこと二十六年にして生れ、〔室〕鳩巣は後るゝこと二十九年にして生れ、〔荻生〕徂徠は後るゝこと三十年にして生れたり」（九頁）であった。

七歳のころ自習で仮名を解するようになり、旺盛な知識欲にまかせ多くの書を読めるようになったが、

益軒の兄楽軒の次子貝原和軒（常春、寛文一一年・一六七一～享保一八年・一七三三）の編集とされるが、織田信長。豊臣秀吉、徳川家康など多数の戦国武将をあげ詳細にその逸話を紹介したこの書については、「朝野雑載は近古の歴史志伝に関する漫録にして、資料は主として先生（益軒）の自ら渉猟せる古文書旧記より採り、間々直接に見聞したる世上の雑事をも記せり」（『全集』第八巻・凡例）ともされている。

『朝野雑載』を益軒の稿であるとする確証はないのであるが、博識の益軒であればこれらの逸話を纏めたとするのもうなずけるところである。ここでは『益軒全集』に収められた『朝野雑載』を益軒の関連書として紹介しておきたいが、『全集』の内、五五四頁にも上る同書には特記すべきものがある。*

＊『朝野雑載』には、戦国武将について貝原益軒が第三代福岡藩藩主、黒田光之に語って聞かせたという筋書きの書がある。筆者はこのことを、葉山郷土史研究会会員、星美由紀氏より勉強会の席上で伺ったことを記しておきたい（山崎光夫『殿、それでは戦国武将のお話をいたしましょう 貝原益軒の歴史夜話』中央公論新社、二〇二〇年）。

『本草綱目』と益軒『大和本草』

『大和本草』は李時珍『本草綱目』（一五七八年成稿）収載の品物をもととして他の群書から補いながら、日本独自のものや渡来のもの加え、その名称・来歴・形状・効能等を記述したものである。そこには医であり本草家である益軒の知見が総動員され、「大和」を冠するにふさわしい本草書が初めてなったといえる。

父に医薬書を読む手ほどきを受け、若年から身体が弱く本草書に親しんでいたという益軒だが、『本草綱目』を知る最初については詳らかでないとはいえ、著名な本草（博物）家の向井元升、稲生若水、木下順庵、中村惕斎等と親交するなかで早くからその重要性を認識していたことは間違いないと思われる。

『本草綱目』が本邦に初めて舶載されたのは、その初版刊行（一五九六年頃）から一〇年も経たない江戸時代初頭であり、初めての和刻本は益軒九歳の寛永一四年（一六三七）に出ている。先述の京都遊学の折、益軒は伏見で藩主光之から書籍を賜っているが、その中に『本草綱目』が含まれていたが（万治二年・一六五九。三〇歳）、三五歳（寛文四年・一六六四）のころまでに熟覧していたという。

寛文一二年（一六七二）、『校正本草綱目（重訂本草綱目）』五二巻が刊行された。これについて『益軒全集』巻之六*（『大和本草』他の本草関係を収録）凡例で記すところをまとめるとつぎのようになる。

＊巻之六には、小野蘭山による詳細な批判『大和本草批正』『大和本草附録批正』があるが、これについては、他日を期すことにしたい。

『校正本草綱目』附録として、益軒による『本草綱目品目』（『本草綱目』所収品目の目録を挙げ傍訓を付したもの）、『本草名物附録』（『本草綱目品目』の遺漏を補い、さらに『本草綱目』の項目から選び益軒が特に見解を加えたもの）の二編を加えた。また、巻之五以下巻末に、益軒による「本草和名抄」（『本草綱目』当該巻の品目に和名を付したもの）を附載した。そして凡例はこの校正本を「世に貝原点本草綱目の名あり。その刻成りたるは、寛文十二年、先生四十三歳の時」としている。なお、『本草綱目』収録品目の和名については、その後五一歳（延宝八年・一六八〇）の時に『本草綱目目録和名』として再びまとめている。

これらの下地となる作業の末に、貝原益軒『大和本草』は、晩年七九歳の宝永五年（一七〇八）に稿が、翌六年、本巻一六巻の刻本が成り、没した翌年（正徳四年・一七一四）、附録二巻・諸品図三巻が追って刊行された。

本書の構成

本書では、益軒が『大和本草』において漢方（薬種）を直接対象としている三項目を選び、現代語訳し

トップへ戻る

考察を加え、本文とした。すなわち「薬を用いるの論」（巻之二）、「薬類」（巻之六）、「薬木」（巻之十二）であるが、読解の益にと『大和本草』巻之一より「序」「凡例」「本草の書を論ず」を加えている。「本草の書を論ず」は『大和本草』の総論ともいうものである。

本書の内容に関する限りでは、益軒は、『本草綱目』を基としながら、そこに見える中国古典医薬学史上の本草書を、その都度文献を明示し検討を加えているものの、ときに『本草綱目』への批判的論述もあり、部分的には懐疑的である。その執筆姿勢は他の群書においても貫かれているといえる。『大和本草』全体における『本草綱目』との異同・比較検討は本書の範囲を超えたものであるが、しかしながら、『大和本草』を導くものは中国古典の本草学であり、その内の代表例が『本草綱目』であることはいうまでもない。従って、本書では副題を「中国古典書への傾倒と自立化」とした。

本書は一部分また特定の視点からとはいえ、『大和本草』を熟読する本格的な試みとなることを目指している。『大和本草』読解には、言うまでもなく広く深い予備知識が前提とされる。そのため、本書では、本文以外に次の情報を補足するなど、内容理解や参照に役立つ構成となるよう図った。

序章　貝原益軒と『大和本草』

益軒「略年譜」と『大和本草』の基本的情報をまとめた。『大和本草』については全巻の収録目録を作成した。また、『本草綱目』『神農本草経』の二書を概説し、中国における本草書の主な流れを簡単に追った。さらに、益軒と『大和本草』についての研究を略述した。

附編

資料として、一、初公開の益軒から稲生若水への書簡を影印・翻刻し、二、中日医薬学・漢方比較年表を作成した。年表は、本文に言及・引用される固有名・事項の注を兼ねるものである。

最後に本文『大和本草』の漢方を読む」について補足する。

「参照・参考文献」は本書全体にわたるものである。

第1章から第6章の後に、益軒の論点をたどる「まとめ」と、「補論　宮崎安貞『農業全書』にみる薬種栽培法」を加え、最後に「結び」として本書の結論とした。

これらによって、本書が『大和本草』全体への研究を目指す読者の導入役となることを願っている。

はじめにを閉じるにあたり、本書と前著『近世日本の「重商主義」思想研究　貿易思想と農政』（御茶の水書房、二〇〇三年）との関係について、簡単に触れておきたい。前著では、近世日本の国民生活（重商主義）がフランスのそれにやや近い農業・自給型「重商主義」であるとの解釈を示した。フランスと日本との違いは、近代黎明期のフランスが海外貿易と植民地経営を行う一方で、自給型農業経営と植民地経営型貿易政策を同時に行うといういわば総合型「重商主義」であったのに対し、近世の日本では、長崎貿易など四つの口にみられるように対外貿易が厳しく規制され、大船建造の禁と並ぶ海外渡航・帰国の禁に代表される「鎖国」下における農業自給型「重商主義」であった。

本書では、「鎖国」＝農業自給型とする前著の解釈が、はたして妥当であるのか否かを検証する試みとして、近世日本における「漢方」の一様相を見るに至った。貝原益軒『大和本草』研究のきっかけについては、本書の「謝辞」をみて頂きたいが、本書執筆の根本的動機は「鎖国」＝農業自給型「重商主義」を再検証するところにおかれている。長崎貿易における輸入唐薬の推移については、等閑視しえないものがある一方で（たとえば、羽生和子『江戸時代、漢方薬の歴史』清文堂、二〇一〇年）、輸入唐薬とならび和薬種の取引（問

トップへ戻る

はじめに　*i*

序章　貝原益軒と『大和本草』

一　貝原益軒略年譜　*1*

二　『大和本草』目録　*10*

三　『本草綱目』『神農本草経』概説　*22*

四　研究史概観　*30*

貝原益軒『大和本草』の漢方を読む

参照・参考文献　*42*

凡例　*49*

一　底本および基本参照資料

二　本文構成および訳出箇所

三　現代語訳について

四　書き下し文について

第1章　自序　*57*

第2章　凡例　*61*

第3章　本草の書を論ず　*75*

第4章　薬を用いるの論　93
薬名弁疑　150
本邦誤用薬品　162
飲食を節する　170
数目類　182

第5章　薬類　197
人参　197　沙参　200　桔梗　薺苨　203　甘草　204　白朮、蒼朮　黄耆　206
当帰　207　地黄　209　紫蘇　211　薄荷　212　川芎　荊芥　213　萎蕤　黄精　214
地楡　香附子　216　忍冬　218　続断　219　葶藶　連翹　附子　220　茵陳　223
細辛　車前　224　麦門　225　沢瀉　独活　226　羌活　227　紅花　黄連　228
瑣陽　巴戟　胡黄連　229　防風　柴胡　230　升麻　231　夏枯草　232　三稜　233
遠志　木通　234　天南星　235　半夏　236　蒔蘿　藜蘆　237　砂仁　白豆蔻　238
草果　239　木香　240　射干　白及　241　五味子　242　冬葵　243　穀精草　244
胡椒　244　山薬　245　百合　247　白芷　248　零陵香　括蔞　249　貝母　251
藿香　252　馬鞭草　豨薟　253　艾　254　龍胆　葛根　256　蓖麻子　259
淫羊藿　紫菀　鬱金　土茯苓　260　牽牛子　天名精　262　百草　263
百草霜　威霊仙　蔓荊子　264　（附録巻二）丸薬　附子　本事方ニ曰　265
煎補湯法　神麹　266　延喜式　時珍カ云　267

トップへ戻る

第6章　薬木　269
楮　269　椿　270　秦皮　272　山茱萸　胡頽子　273　木半夏　蘆薈　274
厚朴　芫花　275　五棓子　孩児茶　276　百薬煎　277　鬼箭　常山　278
丁香　280　桂　281　樟脳　檀香　283　沈香　284　槐　287　茯苓　288
枸杞　290　五加木　292　龍脳　側栢　293　梔　294　黄蘗　楝　295　皁莢　296
枳実、枳殻　297　阿魏　298　桑寄生　呉茱萸　299
まとめ　益軒の論点をたどる　301
補論　宮崎安貞『農業全書』にみる薬種栽培法　317
結び　345
附編　一　貝原益軒から稲生若水への書簡　351
二　中日医薬学・漢方比較年表　貝原益軒『大和本草』成立まで　358
謝辞　383
あとがき　385
索引　407

序章　貝原益軒と『大和本草』

一　貝原益軒略年譜

一　益軒の活動と関係人物を中心に略述した。年齢は数え年、事項末尾の○は関連（一般）事項、最下段には該当年の益軒の主な居住・活動地を記した。

二　作成にあたり『益軒全集』巻之一所収「益軒先生年譜」「著述年表」「益軒先生伝」を基本とし、井上忠『貝原益軒』（吉川弘文館）、貝原益軒（石川謙校訂）『大和俗訓』（岩波文庫）その他諸書を参照した。

西暦	年号	年齢	事項	居所・旅滞在等
一六三〇	寛永7	1	11月14日［西暦12月14日］、筑前福岡藩（当時二代藩主・黒田忠之）の福岡城内東邸に生まれる。父寛斎（福岡藩祐筆役ヵ。儒者、学を好み医薬に通じた）、母ちく（三毛門氏）との五男子の末男。長兄夭逝、兄は上から家時、元端（存斎）、義質（楽軒）。 名は篤信、字は子誠、号は損軒（晩年に益軒）。通称は助三郎、柔斎（26歳、医となって）、久兵衛（39歳、藩主光之より賜名）。 翌寛永8年、博多に移る。6歳（寛永12）で母を失う。継母は上原氏（迎えられた時期不明、寛永13病没）。8歳（寛永14）、穂波郡八木山に一家転居。 ○寛永7、林羅山『多識篇』（古活字版）刊。徳川家光（三代将軍、在位元和9～慶安4）の代。寛永9～10、栗山大膳事件（黒田騒動）。 自習で仮名を解するようになり、草子小説類を読み、猿楽の俗謡を好む。この頃ヵ、『塵劫記』の問を算盤で解く。 ○寛永14～15、島原の乱（父寛斎・兄家時出征）。	福岡
一六三六	寛永13	7		博多 八木山

一六三八	寛永15	9			春、兄存斎から漢字を学び『三体詩』七言絶句の素読を受け、つづいて『平家物語』『保元・平治物語』を読む。 ○初の『本草綱目』和刻出版。幕府、江戸品川・牛込に薬園設置。
一六三九	寛永16	10			『倭玉篇』『節用集』の辞書・字書で文字に習熟。存斎、藩命（医学修業）で京都へ行く。
一六四〇	寛永17	11			父が公務で福岡新大工町に、さらに翌年怡土郡井原村に移るに従う。 ○幕府、京都蓮台野に薬園を開く。寛永の大飢饉。
一六四一	寛永18	12			『太平記』を読む。父、知行所（八木山）を失う。 ○鎖国令完成（長崎出島にオランダ商館）。
一六四三	寛永20	14			父から医薬・食物の性について教授される。『医学正伝』（虞搏）、『医方選要』（周文采）、『万病回春』（龔廷賢）等の医書を読む。存斎、京都から帰る。冬、存斎から受けた四書の素読から経学に眼を開かれて以後、儒教を尊び、仏説を不信として排する。
一六四四	正保元	15		福岡	冬、父が再出仕で江戸入府（正保4年、1月帰福）。この前後、慶安元・江戸入府まで福岡と井原村を往来。
一六四六	正保3	17			初めて『小学』を読む。
一六四八	慶安元	19		江戸	10月、藩主忠之の御納戸御召料方に出仕（四人扶持）。冬、忠之参勤に父と従い初の江戸上府（生涯の江戸行12回の初め）。
一六四九	慶安2	20		福岡 長崎 底井野 福岡	3月、江戸から帰る。夏、元服。8月、忠之の長崎警備役に伴い海路長崎へ行く。帰国後、忠之の叱りを受け閉居15日間、謁見不能の4ヶ月の罰を受ける。11月、処分とけ近侍役として勤務（遠賀郡底井野）。
一六五〇	慶安3	21			8月、再び忠之の怒りに触れ免職、扶持を没せられ浪人となる。
一六五一	慶安4	22			以後数年、講学読書の日々。初めて『近思録』を読む。冬より1年ほど、眼病で読書不能や病気がちに。 ○徳川家光没し、四代将軍家綱。由井正雪の乱。

一六五四	承応3	25	前年冬、博多に、この4月、福岡に居住。春、藩主忠之没し世子光之が嗣ぐ。冬に二度と翌春、長崎へ医書研究のため滞在。父（承応元より在府）は家督を楽軒に譲り隠居、江戸に留まる。	博多 福岡 長崎
一六五五	明暦元	26	3月、父の援助と自ら医者となる決心のもと江戸へ向け出立、海路大坂へ入り、奈良を経て京都で10余日遊ぶ〈生涯の遊洛24回の初め〉。4月末、江戸入り前日、川崎にて剃髪、助三郎を改め柔斎と称し、医となる。入府後は父と藩邸に同居。しばしば儒官林鵞峰を訪ねる。	大坂、奈良、 京都 江戸
一六五六	明暦2	27	10月、父に従い出府、伊勢神宮を拝し帰国。11月、藩主光之の命により出仕（医としてヵ。六人扶持）。	伊勢神宮 福岡
一六五七	明暦3	28	1月、家老・立花勘左衛門重種（後に益軒門人）の組に配属される。3月、『大学』序を講義〈経を講ずる始め〉。4月、命により学問修行（遊学）のため上京。同月、松永尺五（65歳）、山崎闇斎（42歳）を、6月、木下順庵（尺五門人、38歳。以後往来頻繁）を訪問、講義を聞くなど、在京中親しく経学（朱子学・性理学）を学ぶ。 〇江戸、明暦の大火。林羅山、没する。徳川光圀、『大日本史』編纂に着手。	京都
一六五八	万治元	29	2月『大学』を、3月『論語』をそれぞれ初めて講ずる。11月、初めて向井元升（この年、長崎から入京）と会い、以後交歓する。	
一六五九	万治2	30	3月、伏見で藩主光之に謁し、書籍11部（『本草綱目』を含む）を賜る。12月、加増10石（計20石）。	
一六六〇	万治3	31	1月、初めて『小学』を講ずる。このころ、松下見林（34歳）と親交。11月、江戸行きを命じられる。	江戸
一六六一	寛文元	32	2月、林鵞峰の易経講義を聴く。3月、立花勘左衛門の供で有馬温泉に滞留。4月、入京。『孝経』他講ずる。5月、各地の農業視察途次の宮崎安貞が立ち寄り、11月に再上洛、ともに名勝地に遊ぶ。	京都 有馬温泉
一六六二	寛文2	33	5月、藩命で帰国（同月1日、近江・若狭地震）、女原（みょうばる）の宮崎安貞を寄り糸島郡桜井村着。8月、加増10石（計30石）。9月、光之の参勤に従い入京。11月、初めて『中庸』『孟子』を講ずる。	桜井村 京都

一六六三	寛文3	34	3月、初めて『近思録』を講ずる（『近思録』本邦初の講習）。	兵庫湊川
一六六四	寛文4	35	2月、帰藩の命、門人鶴原正林を伴い、途次、兵庫湊川に楠木正成を墓参し、3月帰国。4月、鳥飼に邸宅を、翌月知行150石を賜る。9月、光之の上府に従い江戸に入る。11月、儒員土岐重元と往来。この年、藩の水利事業に建言。このころまでに『本草綱目』熟覧する。	福岡・鳥飼 江戸
一六六五	寛文5	36	3月、藩医西原元畏と上野薬園へ行く。4月、入京、学者と交友を重ねる（ひきつづき木下順庵、向井元升、また中村惕斎（てきさい）（37歳）、米川操軒、黒川道祐、伏原賢忠等）。6月、初めて伊藤仁斎に会う。初めての著書『易学提要』『読書順序』を著し、朱子学を選ぶ決意を表明。12月、福岡の父寛斎逝去（享年69）。	京都
一六六六	寛文6	37	1月、服喪で帰国。2月、講義度重なる。6月、楽軒と父を厚葬。夏、神経衰弱ゥにより休養。10月、藩主参府に先立ち大坂、京都から信濃路を経て江戸入り。 ○中村惕斎『訓蒙図彙』刊。徳川家光没し、四代将軍家綱。	福岡 江戸
一六六七	寛文7	38	閏2月、京都入り。10月、大和に遊ぶ。前年より小便閉塞、淋疾、疝気に苦しみ向井元升の処方で治まる。また痰、喘息を患う。このころから灸を始める。12月、四書の訓点を改める。	京都 大和
一六六八	寛文8	39	3月、出京し帰郷。6月、支藩秋月藩士江崎広道の娘初（はつ）を娶る（のちの東軒夫人）。7月、26歳以来再び髪を蓄え、柔斎改め光之より久兵衛の名を賜る。8月、加増50石（計200石）、知行地変更。9月、光之参府の先発で江戸入り。『朱子文範』『近思録備考』を著す。	福岡 江戸
一六六九	寛文9	40	2月、谷一斎を知る。3月、鎌倉・江ノ島を経て入京。7月、福岡に帰る。11月、荒津東浜に居宅を賜る（翌2月転居、終生留まる）。『小学句読備考』を著す。	鎌倉、京都 福岡
一六七一	寛文11	42	3月、請うて京都へ行き（本屋・版元訪問、五・6月、中村惕斎と星座観察等）、7月帰福。寛文5、在京時に光之の命で益軒に師事してきた功臣の子久野正的（20歳）が病没。9月、書庫を作る。10月、大老黒田一任の子一貫から『黒田家譜』編纂の命を受ける。翌年にかけ宮崎安貞と頻繁に往来。 ○向井元升『庖厨備用倭名本草』刊。	京都 福岡

一六九八	元禄11	69	2月、東軒夫人、僕婢ら総勢9人で大坂、大和をへて京都入り、以後1年半の最後の上洛。9月、常春が剃髪。10月、綱政から存斎の次子重春を嗣子とする許可を得る。	大坂、大和京都
一六九九	元禄12	70	6月、出京、帰国。9月、重春元服。閏9月、自身の古希を祝賀。『和字解』『日本釈名』を著す。	福岡
一七〇〇	元禄13	71	5月、好古病没(享年37)。7月、致仕の命が下る。以降遠くに遊ばず、著述に専念。	
一七〇〇	元禄14	72	2月、藩主参勤に供奉する嗣子重春に戒『贖行訓語(じんこう)』を作り与える。	
一七〇二	元禄15	73	3月、楽軒病没(享年78)。益軒は正月より11度往診。年末からひと月あまり肩瘍を患う。『音楽紀聞』を著す。 ○赤穂浪士大石良雄ら、吉良義央を討つ。	
一七〇三	元禄16	74	2月、重春、婚姻、東軒の姪を娶る。翌月にかけ、武蔵温泉、東西諸郡を巡る。11月、『筑前国続風土記』を綱政に献ずる。冬、泄瀉(下痢)で健康減ずる。『君子訓』著す。	東西諸郡
一七〇四	宝永元	75	東軒夫人、夏から病篤く伏せるが11月癒える。『菜譜』を著す。	
一七〇五	宝永2	76	3月、重春に女子生まれるが、妻没する(享年17)。7月、『三才図会』校正の命を受ける。9月、飢饉につき自らの俸禄米を乞うものに分与。11月、薩摩より初来の甘藷を藩主綱政に献ずる。	
一七〇六	宝永3	77	2月、『三才図会』脱漏の修補を終え献ずる。3月、大宰府に夫人と遊ぶ。4月、重春再婚。7月、朝晩の飯を一椀にする。12月、重春、命で長崎に行き帰る。同月、益軒、重春の家計を自ら司る。	大宰府
一七〇七	宝永4	78	1月、泄瀉を患う。先君光之80歳の賀に詩を献じ、饗を賜る。3月、志賀島、香椎、久留米等巡遊。4月、重春、江戸へ行き6月帰る。5月、黒田光之逝去。	
一七〇八	宝永5	79	4月、東西近郊を歴遊。この年『大和本草』成稿。『大和俗訓』著す。 ○関孝和、没する。	筑前国内
一七〇九	宝永6	80	8月、重春の家計を門人鶴原九皐に委ねる。10月、80歳の祝賀、親類朋友諸客	

			を饗する。この年『大和本草』刻本16巻完成（京都・永田調兵衛版）。『木曽路記』著す。	
一七一〇	宝永7	81	○徳川綱吉没し、六代将軍家宣。新井白石、宣教師シドッチを訊問。 2月、藩主綱政の命により、老齢につき益軒の登城をやめ必要時に諮問となる。5月、『改正黒田家譜』を献ずる。6月、重春に男子生まれる。『楽訓』『和俗童子訓』を著す。	
一七一一	正徳元	82	3月、門人、益軒80の寿を賀す。『五常訓』『家道訓』を著す。	
一七一三	正徳3	84	秋から東軒夫人病激しくなり、12月逝去（享年62。夫人への投薬記録「管理薬剤史」）。『養生訓』『諸州巡覧記』著す。 ○寺島良安『和漢三才図会』成る。	
一七一四	正徳4	85	1月、健康を害し来客を断る。2月、癒えて箱崎に遊ぶ。春、『慎思録』成る。4月、手足が麻痺し、以後床に就き起きず。夏、『大疑録』成る。8月27日［西暦10月5日］益軒逝去、金龍寺に埋葬される（東軒夫人と並ぶ）。碑文は竹田春庵撰による。 ○稲生若水『（新校正）本草綱目』刊。	箱崎
一七一五	正徳5		『大和本草』附録2巻・諸品図3巻刊（京都・永田調兵衛版）。 ○稲生若水、『庶物類纂』362巻まで編纂し没する。	

表1　訳出箇所対照表

・網掛け部分が訳出箇所

本書 章	本書 頁	略称（段落）	底本 巻	底本 項目	底本 丁	益軒全集（頁）	考註大和本草（冊・頁）
		自序	巻之一	大和本草叙（鶴原韜）	1〜4	1	一・1〜2
1 自序	57	自序		大倭本艸自序	1〜2	2	一・1〜2
				大倭本艸目録	3〜17	3〜10	一・1〜13
2 凡例	61	凡例		大和本草凡例　凡十三件	18〜23オ	11〜14	一・1〜5
3 本草の書を論ず	75	本草		論本艸書	24〜31	15〜19	一・1〜7
				論物理	32	19〜30	一・7〜23
				漢名未詳類	48ウ	30	一・23
				本朝書所載物名文字	51オ	31	一・25
				日本古書及世俗誤訓倭名	52オ〜53	32〜33	一・25〜27
4 薬を用いるの論	93	用薬	巻之二	論用薬	1	34〜51	一・29〜53
薬名弁疑	150	薬名		薬名弁疑	29	51	一・53
本邦誤用薬品	162	誤用		本邦誤用薬品	32ウ	53	一・56
飲食を節する。	170	飲食		節飲食	34ウ	54	一・57
数目類	182	数目		数目類	41〜47	58〜61	一・64〜70
5 薬類	197	薬類	巻之六	薬類	1〜35オ	134〜156	一・185〜226
				民用草類	35オ〜40	157〜160	一・226〜232
附録薬類	265	薬類附	附録巻之二	薬類	19ウ〜20ウ	454	二・346〜348
6 薬木	269	薬木	巻之十一	薬木	1〜31	256〜284	一・431〜467

第1章　自序

大倭本草巻之一

大和本艸自序

〔原文には段落がないが、現代語訳は適宜段落を設け、書き下しは原文のまま段落なしとした。〕

天地（あめつち）の道〔天地自然の様〕は、常に動いて息（や）むことがない。しかしながら、天地はとりたてて事を行っているのではなく、生物によって事がなされているだけなのであり、それが万物が生々して尽きることのない理由である。これによって、六合（りくごう）〔全宇宙〕に産み出される物は浩穰（こうじょう）〔広く豊か〕であり、究め尽くすことができず、そのうち民用となるもの〔人が手にするもの〕も、また弘く多く限りがない。

したがって、学者がさまざまな事物を明らかに知る作業もまた、広くならざるを得ない。古人が言っていることがある。「宇宙の内の事は、皆、わが儒教の分限の内である」と。思うに、経書は道を載せ、史書は事実を記すものである。次には物を集めた書物もまたなくてはならない。これが、本草と諸々のことを書き載せる書の欠かせない理由であり、さらには、本草の学が民生日用〔日常生活全般のため〕に常に大切となる理由でもある。

また、本草の良毒を推し測ることは誠に難しく、庶民がそれを用いるべきか否かの選択もまた、慎重にすべきである。ただその名を多く知るだけではいけない。物理の学〔事物のことわり・本質を究める学〕が関っていることを過小に見てはならない。それによって古えの聖人が人々の知識を開発し事を成し遂げさせた〔開物成務。『易経』より〕功績は誠に大きいものがある。しかし、天下の事物は日々解き明かされて止まることがない。故に、古えには無かったが今は

く博い学に至るための入門とすることで、物理の学をわずか万分の一でも補うこととなればと願うだけである。もしも、種々の学問に広く通じた君子が、本書の不足を補ってより良くし、その誤謬を改め正すのであれば、即ち、私がこれを誠に願うところである。

宝永戊子芒種日〔一七〇八〕

筑前州後学貝原篤信序

大倭本艸自序

天地之道常ニ行レテ而息マず。不焉而已矣而シテ天地別ニ為す所無く只生物を以て事ト為すのみ。以て万物生生シテ窮せざる所也。是ヲ以て六合之内産する所之品物浩穰ニシテ究め尽す可からず。不矣其民用ト為す者亦弘多埒リ無し。矣然らば則ち学者明ニ庶物ヲ於知る之功亦豈広博ナラざる不可けんや。乎古人の謂フ有り。宇宙ノ内ノ事皆吾カ儒分内ノ事ト。蓋し経は以て道ヲ載セ史は以て事ヲ記ス。其に次ぎ物ヲ集めル之書亦無く可からず。不是本艸暨諸ロ載籍之闕く可からざる所以也。不且本艸之学以て民生日用ニ切ナリト乎為す所ノ者亦以有る也。品物之良毒誠ニ測リ知り難ク衆人之用捨も亦宜しく慎み択フベし。但多ク其名ヲ識りて而已むニあらず也。不然らば則ち物理之学其関係亦小ト為す可からず也。不夫以ルニ古昔聖人物ヲ開き務ヲ成ス之功固ニ至レリ、乎大ナル哉。然るに天下之事物日ニ開ケテ未だ已まず。不故に古に無き所ニシテ而今有リ古に知らざる所ニシテ不今知る者枚ク記ス可からず。不其用ヲ済ス亦廃棄ス可からずのみ。且華夷各有無ヲ異ニシ南北互ニ宜忌有り。故ニ物理ヲ記載スル之功後世ニ到りテ漸次ニ時ニ随ひテ無かる可からず也。不是古来諸家本艸之述作以て世に出でテ而一時ニ于止らざる不所也。不佞幼きより自多病好テ本艸ヲ読み物理之学ニ於志有るコト也尚シ。矣嘗て講余之日ヲ以て粗於本艸之要言ヲ於纂録シ且群籍之中ニ於

第2章　凡例

大倭本草巻之一

大和本草凡例　凡十三件

凡例1

一　本書『大和本草』は『本草綱目』に載る諸説の中、最も大切なものを選び要約して収録している。諸品の形状、性味の詳かなものはここに載せていない。それらについては『本草綱目』を熟読すべきである。

一　此の書、本草綱目に載る所の諸説之中、最も切要ナル者ヲ揀ヒ約シテ之ヲ収録ス。夫の諸品之形状、性味之詳かナル者の若きは此ニ載せず。須く本草ヲ熟玩スベし。

凡例2

一　天下の品物は無限であり、『本草綱目』に載るところ、ただ一千八百余のみ。その載らないものもまた甚だ多く、『本草綱目』の外、群書の中に記載する所の品物もまた多くある。書籍が登場して以来、ここにおいて幾千年、奇品、異物が群書に散見されるのであり、いったいどうして、それらを手に入れて記録することが容易であろうか、いや容易ではない。『本草綱目』は衆人が見ることのできるものであり、今本書の中に抄録されていなくてもよいのである。故に、本書の中に『本草綱目』から取り上げるものは、千のうちの百あるいは十のうちの一に過ぎないのである。ささやかなこのような書を編録する理由は、およそ『本草綱目』に載っていなくて、他の群書に載せられているものを収載したいという志を長くいだいてきたからである。故に心を用いて渉猟し、蒐索することが多く、何年も経過した。見聞するところに随い、えらび集め、それによって読者の観覧に提供したいだけである。ただし、事がお

おげさで偏っていたり、言葉がでたらめであったりするものは、すなわち捨てて取らなかった。かつ、中国の群書に載らない所で、わが邦に在るもの、かつて、この私が自分で見たり聞いたりしたもの、あるいは人々が言っているものについては、その品物の名称や形状を、あらあら記して他の人の考察に備え助けたい。願う所は、初学の人が本書にしばらく依拠して、あらあらあまたの品物について知り、その後に群書を見て考察してもらうことである。そうであるならば、民用の多少の助けになるといえようか。思うに、群籍は厖大であるから、すぐにはそれらを読むことができない。本書のようなものは、それらを知る近道であり、労力を省くことができるといえるのである。

一　天下之品物は窮まり無く本草綱目に載る所は、止一千八百余名而已。其の載せざる所も亦甚だ多くして、本草之外、群書之中、記載スル所之品物も亦多ニ居レリ。蓋し、載籍以来此ニ幾千年、奇品、異物之散見シテ群書ニ雑出すルは、豈に、得テ枚ク記シ易からン乎。本草之一書ハ、衆人之視る所、今此の書之中之ヲ抄録セずト雖も可也。故ニ此の書之中に本草ヲ抄取スル者ハ、仟佰ニシテ什一なる而已。区区たる此の書ヲ編録スル所以ノ者ハ凡そ本草に載せざる所ニシテ、群書之載スル所ノ者、予、之ヲ収載スルニ志有ルコト久シ。故ニ心ヲ用テ渉猟シ、蒐索スルコト多ク、年所ヲ歴る。聞見スル所ニ随テ、揀び採シテ之ヲ輯録シ、以て、観覧ニ備フル而已。惟だ、事、迂僻ニ近ク、言、怪誕ニ類スルハ、則ち舎てテ取らず。且つ、中華群書之載せざる所にして、吾邦之在る所、愚カ之嘗て親ずから観聴スル所、民俗ノ称謂スル所、品物之名称、形状、亦粗之を記シテ、以て稽考ヲ助ク。希フ所ハ則ち、初学之人、博ク群書ヲ考ふるコトヲ待たずシテ、姑ク

第3章　本草の書を論ず

大倭本草巻之一

本艸ノ書ヲ論ス

本草1

あらゆる草木、禽獣、虫魚、金玉、土石を記載した書は、『神農本草経』を始まりとする。三六五種を収める。これを「本経」とする。梁の陶弘景が『名医別録』を作り、*『神農本草経』を補った。同じく三六五種である。以後、歴代の名医がそれぞれ増補していき、専門諸家の本草書も多くなり、優れた品がしだいに加えられた。明の李時珍は、本草書から品を選び集め、自己の見聞を加え、それまでの本草書を拡充した『本草綱目』を著し、万物が非常に多く備えられた。〔一五七八〕万暦六年に成った。本朝の天正六年にあたる。そこに載せられている品数はすべて一八九二種である。

凡艸木、禽獣、虫魚、金玉、土石ヲ記セシ書、神農本艸ヲ始トス。三百六十五種アリ。是ヲ本経トス。梁ノ陶弘景名医別録ヲ作リ、神農本経ヲ増補ス。又三百六十五種アリ。コレヨリ以来歴代ノ名医各増益有り、諸家ノ本草多くシテ、名品漸ク加レリ。明ノ李時珍、歴代本草ノ内ヲ撰ヒ輯メ自己ノ見聞ヲ加ヘ之ヲ広メテ本艸綱目ヲ作リ、品物大ニ備ル。万暦六年ニ成レリ。本朝ノ天正六年ニ当ル。載る所ノ品数凡一千八百九十二種アリ。

［註］　*『名医別録』を作り――「陶弘景が『名医別録』を基に」の誤りか。『名医別録』は、『神農本草経』とほぼ同時代（後漢末）に作られたと考えられているが、『本草経』と同様に歴史の中でその原本は失われた。陶弘景『本草経集註』の序文には「神農本経の三品合わせて三六五を主とし、又進めて名医副品亦、三六五、合わせて七三〇種とす」とあり、一番の「玉泉」

トップへ戻る

より五六三番の「醤」までが『名医別録』の主な内容となっている［森：名医別録解説］。

蜀の韓保昇（一〇世紀）がいう。薬に玉石、草木、虫獣があって、本草といわれるのは、諸薬の中、草類が最も多いためである、と。○宋の掌禹錫（『嘉祐本草』）がいう。『神農本草経』三巻は神農の作になり、経書に見えない。『漢書』「芸文志」にもまた、その書名は記録されていない云々。『漢書』の前漢「平帝紀」及び「樓護伝」に本草の名が初めて見える。『淮南子』（前漢）にいう。神農、百薬の滋味を嘗め、これにより医術が興る、と。○寇宗奭（一一～一二世紀、宋代）がいう。『漢書』に本草のことを言ってはいるが、いずれの代から作るかは決められない。『世本』（漢初頃）によれば『淮南子』で、神農が百草を嘗め薬を調合するというが、ここにも本草の名は無い。ただ、『帝王世紀』（西晋、三世紀）にいう。黄帝、岐伯（『黄帝内経』で黄帝と問答する）に命じて草木を嘗め味わい本草を見定め、医術・治療法を生みだし民衆の病を療えさせた。すなわち本草の名、黄帝より始まることを知る、と。○陳蔵器（七～八世紀）は、唐の玄宗皇帝の開元の時の人で『本草拾遺』を撰した。時珍がいう。その著述は、広く群書を極め、物類を調べ真を明らかにし、謬誤を訂正し、隠れているものを余すところなく探し集めた。これは『神農本草経』以来ただ一人である、と。またいう。歴代の本草書では、陳蔵器のみが物類を弁別することで最も精密詳細である。最も信じるにたる、と。○歴代の本草書は『本草綱目』第一巻に収載されている。

蜀ノ韓保昇カ曰く。薬ニ玉石、艸木、虫獣有りて、而本草ト云ふ者ハ、諸薬ノ中、草類最も多シト為レハ也、と。○宋ノ掌禹錫カ曰く。本艸経三巻、神農ノ作る所にして而経ニ見エず。不漢書ノ芸文志ニモ亦録するコト無し云云。前漢ノ平帝紀及ヒ樓護カ伝ニ本草ノ名初テ見ユ。淮南子ニ云ふ。神農、百薬之滋味ヲ嘗ム。是れニ由り、医方興ル、と。焉○寇宗奭カ曰く。漢書ニ本艸ヲ言ふト雖も、何ノ代自よりし

第4章　薬を用いるの論

用薬1

薬に五味・四気・七情*がある。七方*十剤*には「君臣佐使*」・「升降浮沈*」があり、服薬の禁忌には、妊娠の禁忌、飲食の禁忌、薬名の同異がある。また、李東垣(りとうえん)〔代金〕は証に合わせて薬を用い、その凡例等の諸説は『本草綱目』序例「李東垣随証用薬凡例」に詳述されている。熟覧しなくてはならない。

薬ニ五味・四気・七情有り。七方十剤は君臣佐使・升降浮沈有り。服薬の禁忌に妊娠の禁忌、飲食の禁忌、薬名の同異有り。又、李東垣証ニ随ひ薬を用ひ、凡例等の諸説皆之(これ)ヲ本草序例ニ載セテ而詳備ナリ。熟覧セざる可からず。不不

［註］　＊五味・四気・七情――**五味**＝甘・酸・辛・苦・鹹。　**四気**＝寒・温・熱・涼、四性ともいう。　**七情**＝薬物配合の七種の異なった作用を指し、単行、相須、相使、相畏、相悪、相反、相殺をいう。［漢方用語大辞典］（以下、［用薬1］の註全体にわたる）

＊七方――大方・小方・緩方・急方・奇方・偶方・復方。

大方(たいほう)（大剤）＝邪気が盛んで、兼証（兼挟む病証）があり重病の疾患に用いる。薬味が多く量も多い。多量の薬を一回で飲みきる。薬方例：大承気湯。　**小方**（小剤）＝邪気が軽く、体の表面にあって兼証を伴わない緩和な薬剤。薬味も少なく、回数を多く服用する。漢方例：葱豉湯。　**緩方**＝からだの抵抗力を増進し、病を自然に除去、慢性で虚弱体質の人に使用。緩和な作用を持つ生薬で構成され、薬物の気味が薄い。湯剤のように迅速な作用を期待しない。　**急方**＝急病・重病人を迅速に治療する。気味が厚く、薬性が激烈。湯剤。漢方例：四逆湯。　**奇方**＝近位（上焦）の病気。症状が比

薬名弁疑

薬名1

粉草（ふんそう）　時珍はいう。甘草（カンゾウ）〈薬類5〉について今の人は、ただ寸径が大きくて締まり横断紋のあるものを良質としている。これを粉草という、と。

○粉草　時珍云ふ。甘草。今人、惟大径リ寸ニシテ而（ただおおわた）結緊断紋ナル者を以て佳ト為し、之ヲ粉草ト謂ふ、と。

薬名2

青木香（せいもっこう）〔大和本草：巻之八（草之四）・蔓草〕　『本草綱目』〔草部旁草類：第一四巻〕で調べると木香〈薬類49〉である。時珍はいう。後世の人が馬兜鈴（バトウレイ）の根を青木香と呼んだからである。これを木香と呼び、南木香（ナンモッコウ）や広木香（コウモッコウ）ともしている、と。今考えてみると、馬兜鈴を土青木香ともいう。

○青木香　本草を按（あんず）るニ即ち木香也。時珍云ふ。後人、馬兜鈴根ヲ呼ぶに青木香ト為すに因る。乃ち木香と呼び、南木香、広木香ト為す、と。今按ずるに馬兜鈴ヲ又土青木香ト云ふ。

薬名3

牙皁（がそう）　時珍はいう。皁の実に三種有る。一種は小さいもので猪牙（チョガ）のようなものである、と。『肥皁の皁角は皁莢（ソウキョウ）〈薬木29〉であり皁刺ではない。』

○牙皁　時珍曰ふ。皁実に三種有り。一種は小さく猪牙の如し、と。『肥皁の皁角は亦是れ皁莢にて皁刺に非ず。』

薬名4

荊瀝（けいれき）　牡荊（ボケイ）*の汁液〔しる〕である。『本草綱目』〔木部灌木草類：第三六巻・牡荊〕にある。　○荊瀝　牡荊之瀝也。本草ニ于（いし）見ゆ。

〔註〕　*牡荊――クマツヅラ科ニンジンボク（人参木）。生薬名：①牡荊子（ぼけい）。②荊瀝（けいれき）。　薬用部：①果実。②根の汁液（普通、火で焙り、両端からでる汁を集める）。　薬理作用：本草書に、牡荊子は感冒、荊瀝は去痰剤とする。〔伊沢：薬用植物〕

本邦誤用薬品

誤用1

人参（にんじん）〈薬類1〉　篤信は考える。世の中の医師は人参に薺苨（セイネイ）〈薬類4〉、桔梗〈薬類3〉、漏蘆（ロウロ）〔本経・巻上〕、防葵（ボウキ）、節人参『味の苦いもの』などで代用する。しかしながら、これらは性味が各々異なり同じ類ではない。また、これらは疎漏、濫悪の物なので代用にしてはならない。いわゆるただ無益なばかりでなく、害を及ぼすものである。もし、しかたなく、これに代用するのであれば沙参（シャジン）〈薬類2〉、羊乳根〔→薬類2註〕を用いればよい。二物はその性が軽薄で起死回生という効果はない。しかしながら多く用いるのであれば、則ち滋養となり小補が無いわけではない。それに、性は平淡であり毒はなく人を害することもない。だから張潔が古く沙参をもって人参に代えたことは誠に理由のあることである。

○人参　篤信謂へらく、世医人参ニ代るニ薺苨、桔梗、漏蘆、防葵、節人参『味苦き者』等ヲ以てス。然シテ（而）、性味各異ニシテ相類セ（不）ず。或は是れ疎漏、濫悪ノ物にて代用すべ可（不）からず。謂ふ所の徒（タ）益無きのみに非ずして（而）、又之を害する也。苟（モシ）已むコトヲ得（不）ずして（而）之ヲ代へハ、沙参、羊乳根ヲ以てセハ、則ち可也。二物其の性軽薄ニシテ死を起シ生を回する之功無しト雖も、然して（而）多く用ヒハ則ち滋養スルコト亦小補無きに能はず（不）。且つ、平淡ニシテ毒無く人ヲ害せざ（不）る故、張潔、古く沙参ヲ以て、人参ニ代フルは誠ニ以（ユヘ）有る也。

誤用2

五味子（ごみ）　朝鮮から来たものは真に五味があって用いるとよい。中国からきたものはこれに準じるが、本邦の産のように味が苦すぎて、恐らくは滋養補給や収斂の効能は無く、頻尿の憂いがあるので、用いては

第5章　薬類

薬類1　人参（にんじん）

参の字の本は薓、あるいは省いて渗という。人の手足のようである。故に人参という。朝鮮の産を上品とし、中国にもこれを用いる。中国では、また上党〔秦から隋にかけての郡名。現在の山西省〕の人参を良しとする。寇宗奭（こうそうせき）がいう。上党郡のものはその値が銀と等しい、と。中国では銀と等きをもってはなはだ貴としている。今、本邦に朝鮮より来るものは値が貴く銀の一〇倍以上はする。故に往々偽作のものがある。沙参（シャジン）〈薬類2〉、薺（セイ）苨（ネイ）、桔梗などの薬品をもって真を乱すものが多い。これを選ぶには精詳でなくてはならない。大概、堅実であって、偽作ではないものを用いるべきである。〇唐人参は、長崎に来るものが朝鮮に次ぐ。〇ヒゲ人参は人参の髭である。これもまた、異邦から来たもので本邦の産ではない。堅実であり、大人参の性の淡いことに勝っている。〇節人参というものがある。葉は芹に似ている。根に節があり髭が多い。山中陰湿の地に生じる。その髭を髭人参という。節人参はその大きな根をいう。薬店でその根と髭を売るが味は苦く気を泄する。人参の気味とは違うので用いてはならない。草医が、これをもって人参に代へて用いるのは甚だ非である。また、近年、世上にセリ人参といって芹に似た草を植えている。味も芹に似てムカゴのようである。その根の味は甘いが、性についてはいまだに明らかではない。本邦の医師は人参の値が高いために代用するものが多い。トトキ人参、ツル人参、この二種は砂参である。人参に代えて用い、大きく補うことはないが害はない。また、萎蕤（イズイ）〈薬類14〉は一切の不足の症を治し、人参に代えて用いる。寒

でもなく燥でもなく大いに殊効がある。『本草綱目』および李中梓〔明末清初〕『本草通玄』にもある。人参の代薬にこの三種の外は用いてはならない。ただ、益がないばかりか害がある。あるいは、漏蘆*〔本経・巻上〕と防葵*を人参に代えて用い、また薺苨、桔梗を人参に代えて用いる人がいる。あるいは右の薬に甘草を煮染て偽り売る。これらは性が各々別であって用いてはならない。『延喜式』に日本諸州の土産に人参があるが、これもまた砂参〔沙参〕を人参としているものである。

○王海蔵〔元代、王好古〕に肺熱には人参を用いてはいけないとする説がある。王節齋〔明代、王綸〕もまた、これに従い賛同していう。参耆〔人参と黄耆〕は良く肺火を助けるが、陰虚火動の病に大いに人参を服することを忌う。服することが過多である者はまた治し難い、と。李時珍および李中梓ともに張仲景・李東垣・朱丹溪の説を引き二人の王氏の非を論じている。『本草綱目』〔草部山草類第一二巻〕「人参(正誤)」及び李中梓『本草通玄』に出ている。○陶弘景がいう。人参を新器の中に納れ密封し何年も開けてはならない。頻りに様子を見れば蛀〔きくいむし〕が生じやすい。細辛を交えて置くとよい。☆李言聞〔時珍の父〕がいう。鉄器を忌む。しかしながら、諸医往々にして鉄を忌まない、と。☆○人参を煎じ、あるいは水に浸して汁を取って飲み、あるいは人参を膏に煎じ、その滓を売ることがあるのでよく見きわめないといけない。和漢ともにこのようである。○人参の生根は昔朝鮮から来て江戸にあったが、今はない。

人参　参ノ字、本ハ蔘或は省テ寖ト作ス。人形手足ノ如きナル者有り。故に人参ト云ふ。朝鮮ノ産ヲ上品ト為し、中夏ニモ之ヲ用ふる。中夏ニハ又上党ノ人参ヲ良ト為す。宗奭カ曰く。上党ノ者、其の価銀と与等シ。中夏ニハ銀と与等しキヲ以て甚だ貴ト為す、と。今、本邦朝鮮自り来る者は価貴重、奚ソ翅銀ニ十倍スルノミナラン。故に往往偽作ノ者有り。沙参、薺苨、桔梗等其の余の薬品ヲ以て而

第6章　薬木

大和本草巻之十一

薬木

薬木1　樗（からすのさんしょう）

この木は世に知る人が稀である。葉は白膠木（ヌルデ）*に似て長大であり、臭い。その樹は節が多く、歪み、曲がり、材木とならない。故に古書に悪木なりという。小さい時はとげが多く、長大になればとげがなくなる。この木は日本に元々ある。京都にあり、また北州〔北山杉などの植生されている京都北方の諸地方か〕にもあるという。近年唐から来た香椿（チャンチン）によく似ている。同類である。花があり、実がある。鳥は好んでその実を食べる。日本人は樗と椿とを知らないので先年朝鮮人が来た時、二つの木はいずれの木かと問うた際、朝鮮人も知らずに誤まり偽って他の木を樗であると答えたという。樗を「おうち（アフチ）」と訓ずるのは誤りである。「おうち」は楝（薬木28）である。

樗（カラスノサンセウ）　此の木、世ニ知る人マレナリ。葉ハヌルテニ似テ長大ナリ。臭シ。其の樹節多クユカミ、マカリテ材トナラス。故ニ古書ニ悪木也ト云ふ。小キ時刺（ハリ）多シ。長大ナレハ刺無し。此の木日本ニ元来之れ有り。京都ニアリ、又北州ニモアリト云ふ。近年カラヨリ来レル香椿ニヨク似タリ、同類ナリ。花アリ、実アリ。烏コノンテ其の実ヲハム。日本人樗ト椿トヲシラスシテ先年朝鮮人来リシ時、二木イツレノ木ゾト問シニ朝鮮人モシラスシテ、アヤマリ偽テ佗ノ木ヲ樗ナリト答ヘシト云ふ。樗ヲ



アフチト訓スルハ誤ナリ。アフチハ棟（センタン）ナリ。

［註］＊白膠木――ウルシ科の落葉高木ヌルデ。『本草綱目』果部味類・第三二巻に「塩麩子（ふしのき、ぬるでの）」とあり、その頭注に「塩麩子は塩麩木、すなわち五倍子樹、ヌルデ〔学名略〕の果実を述べているものであって、その枝葉にできる虫こぶ「五倍子」〔虫部卵生類・第三九巻〕について記述しているのではない。（木島・注）」と記されている。［→薬木10］

薬木2

椿（ん）ち　葉は漆樹の葉に似ている。樗は古来本邦にあった。椿は本邦になかった。この木、近年、木幡（こはた）〔京都宇治〕の萬福寺〔臨済宗大本山。隠元隆琦創建、寛文元年（一六六六）〕に中国よりもたらされた。寺僧、この葉を羹の上に加えて香気を助けた。近年は伝え植て所々に多い。その葉は枝についている。両面が相対している。上下に葉がある。樗の葉のようである。葉の広さは二寸〔六センチ〕、長さは五寸ほど。葉は真ん中の筋が赤い。これを食えば香気がある。花はなく実がない。その幹は真っ直ぐである。椿の根と皮は薬とし、その根から苗が多く生じてとても繁生する。成長が早く、茂りやすい。数年の内に大木となる。広地に多く植えて薪材とすべきである。若葉を摘み湯びきをして炙り、煎じて茶とし、あるいは干して末にし、茶に点じる。香味はよい。このこと『園史』〔明代、継儒カ、陳〕に出ている。『荘子』〔逍遥遊篇〕にいう。上古に大椿というものがある。八千歳をもって春とし、八千歳を秋とする、と。○この木を削れば木理（もくり）は美しく器材とすべきである。本邦では古来、椿をツバキと読み誤ってきた。源順『和名類聚抄』にも椿を誤ってツバキと訓じている。ツバキは山茶（サンチャ）〔大和本草・巻之一二（木之下）花木、附録巻之一・木類〕である、椿ではない。およそ、漆、椿、塩麩木（ヌルデ）、黄櫨（ハジ）、その葉はすべて相似している。椿も人によってはこれに触れて小瘡を生じる。漆のようである。『本草綱目』☆に椿、樗を一つの条に載せて分けていない。☆これを見るものは分別しなくてはならない。

椿（チン）　葉ハ漆ノ樹ノ葉ニ似タリ。樗ハ古来本邦ニ之れ有り。椿ハ之れ無し。此の木、近年木幡（ハタ）ノ万福寺ニ中華自り来ル寺僧、葉ヲ以て之ヲ羹ノ上ニ加へて而香気ヲ助ク。近年ハ伝へ植へテ処々ニ多シ。其の葉枝ニ附く。両々相対ス。上下ニ葉有り。樗ノ葉ノ如シ。葉闊（ひろ）サ二寸、長さ五寸計（ばか）り。葉正中（マン）之筋赤シ。之を食へハ香気有り。花ナク実ナシ。其の幹直（カラスク）ナリ。椿根皮ハ薬ト為し其の根ヨリ苗ヲ多ク生シテ甚だ繁生ス。長シヤスクシケリヤスシ。数年ノ内大木トナル。広地ニ多クウヘテ薪材トスヘシ。若葉ヲツミテ湯ビキテアフリ煎シテ茶トシ、或はホシ末シテ茶ニ点ス。香味ヨシ。此の事園史ニ出タリ。荘子曰く。上古大椿ト云ふ者有り。八千歳ヲ以て春ト為し、八千歳ヲ秋ト為す、と。○此の木削レハ木理美シ、器材トスヘシ。本邦古来、椿ヲツバキトヨミアヤマレリ。順和名抄ニモ椿ヲ誤テツハキト訓ス。ツハキハ山茶ナリ、椿ニアラス。凡そ、漆、椿、樗、塩麩（ヌルテ）木、黄櫨（ハジ）、其の葉皆相似タリ。椿モ人ニヨリコレニ触れテ小瘡ヲ生ス。漆ノコトシ。本草ニ椿樗一条ニノセテ分けず。不之ヲ看ル者分別ス可し。

［註］　☆『本草綱目』に…分けていない。――益軒が指摘するように、確かに『本草綱目』は木部喬木類・第三五巻において「椿樗（ちんちょ）」と並記している。ただしその内容において、時珍が大項目扱いとして双方の違いを詳述していることにも注目しておきたい。たとえば、時珍は次のように言っている。

「《釈名》香しきものを椿と名る。集韻〔宋北〕には櫕（くん）と書き、『尚書』の〔夏書には杶（じん）と書き左伝『春秋左氏伝』〕には樁（じん）と書いてある。臭きものを樗と名ける。」以下《集解》に「恭〔蘇恭〕曰く、椿、樗の二樹は形が相似てゐるが、ただ樗木は疎であり、椿は実してゐるので区別する。」「頌〔蘇頌〕曰く〔…〕爾雅に『栲（たう）は山樗（さんちょ）なり』とあり、郭璞（かくぼく）〔晋〕の註に『栲は樗に似て色少し白し。山中に生ず。因て名く。亦た漆樹に類す』とある。」「宗奭曰く椿、樗はいづれも臭い。ただ一種は花あつて子を結び、一種は花なくして実らぬ。」「禹錫〔掌禹錫〕曰く、樗にして花あるものは荾（さや）がなく、荾あるものには花がない。その荾は夏期に常に臭樗上に生ずる。椿上に荾のあるものは見たことがない、然るに、世俗では椿、樗の

一　本文・註に登場する人名・書名に簡略な註を付して並べた。
二　人物の生没年・主な活動時期、著作刊行（成立）年などをもとに配列した。
三　中国の項目を基本として、日本を■（▼は和刻本、❖は益軒関連の事項）で段を下げて記した。
四　［　］は当該事項のある本文中の章節・段落を示す（本文「凡例二」参照）。ただし、『本草綱目』『神農本草経』を除く。

〈西暦〉　●中国　■日本

〈前770〉　●春秋戦国　■縄文

『易経』　周代に成立した世界最古の占い書、儒教五経の一つ。［飲食（表題）］

師曠（春秋時代・晋）　晋の平公に仕えた盲目の楽師。『禽経』［本草9］は中国各地方の鳥類記。

『詩経』　中国最古の詩集、五経の一つ。国・雅・頌の三部に分け、三〇五篇を集める。

『楚辞』　『詩経』と並ぶ中国古代の詩集。［数目1］

『書経』　『尚書』また単に『書』とも称される儒教五経の一つ。堯舜時代から秦の穆公に至る史書（虞書、夏書、商書、周書からなる）。［飲食14］

『論語』　孔子（前五五一～前四七九）の言行・教えを弟子が記録した書。四書の一つ。［用薬7］

『荘子』　『老子』と併称される道家の代表的著書。荘子（前三六九～前二八六）。［薬木2］

『山海経』　中国最古の地理書。各地の山に産する動植物・鉱物から物産・風俗、また怪獣・妖怪や神々など空想的なものも記述する。［本草12］

『爾雅』（春秋戦国以降）　中国最古の類語辞典。漢字を意味により一九部門に分け類義語・訓詁を集める。一三経の一つ。［本草6・12・12註／薬名67／薬木2註］

『春秋左氏伝』　中国春秋時代に関する最古の史料。［薬木2註］

『孟子』　戦国時代、孟子（前三七二頃～前二八九頃）の言行を記した書で、四書の一つ。性善説。［凡例12／本草10］

『荀子』　戦国時代末、荀子（前二九八頃～前二三八頃）とその学派による著。性悪説。［凡例12／本草10］

『周礼』　周の官制を記した書。注釈書に漢の鄭玄注、唐の賈公彦疏がある。［数目6］

〈前221〉 ●秦 ■縄文

倉公（淳于意）　紀元前一八〇年頃、陽慶という人物から黄帝、扁鵲の脈書（六七種の疾病の名称などが書かれた）を伝えられたという。『史記』扁鵲倉公列伝。［数目47］

〈前202〉 ●前漢 ■縄文

『皇帝内経』　中国医学文献中最古の典籍で、原書は前漢末から後漢初に成立。『素問』（医学総合理論）、『霊枢』（物理療法・鍼灸術）の各九巻八一編からなり、皇帝（古代伝説上の君主）が岐伯・伯高など六名の臣下と問答する形式が基本［本草2／用薬18・84／薬類53］。『素問』［用薬1・16／数目1・4・13・51］、岐伯［本草2／用薬6・16・18］

『淮南子』　前漢の淮南王劉安編、二一編。当代の学者を結集し、老荘（道家）の説を中心に儒家・墨家・法家などの天文・暦数・神話伝説・地理・本草など広範囲の知識を記載させた。［本草2／薬類22／薬木21］

『礼記』　周末から秦・漢の古礼に関する諸説をまとめた書。五経の一つ。［数目14・43］

『世本』　黄帝以来の帝王・諸侯・卿大夫に関して系譜・諡・器物の発明などを羅列的に記した書。［本草2］

『春秋元命苞』（前漢末〜後漢初）　『春秋』「衛」外典。［薬木20］

〈25〉 ●後漢 ■弥生　飛鳥

『神農本草経』（序章三参照）　中国現存最古の本草書。三六五種の薬物を、薬物の効能と使用目的の違いにより、上薬（一二〇種。毒性が小さいか無毒で補要に用いる）、中薬（一二〇種。有毒と無毒があり補養と疾病攻治に用いる）、下薬（一二五種。毒性のあるものが多く疾病攻治に用いる）に分けて収める。

『漢書』（八〇頃成）　前漢の歴史（高祖から王莽の一二代二三〇年間）を記した紀伝体の書、班固撰。本義一二巻、表八巻、志一〇巻、列伝七〇巻の計百巻。司馬遷『史記』とともに中国の史書を代表する。［本草2・3］

許慎（五八?〜一四七?）　中国最古の字書『説文解字』を編纂、子の許冲が完成し一二一年、安帝に献上された。［本草12註］

『尚書緯』（漢代）　鄭玄（一二七〜二〇〇）注による『書経』解釈書。『隋書』経籍志には隋代に散佚された多くの書物が記載されているが、その中に鄭玄注『尚書緯』三巻がある。［数目14］

華佗（二世紀〜三世紀）　医術に巧みで、不老不死の術を会得。鍼灸・薬剤を用い麻酔薬の麻沸散を使って外科手術をした。官職に就くのは拒んだ。魏の将軍・曹操の侍医となるが、束縛されるのが嫌で逃げ、逮捕され殺された。

張仲景（張機）（二世紀後半〜三世紀初め頃）　後漢後期の官僚・名医。三世紀初頭に『張仲景方』を著したとされ、

一一巻・附翼四巻（一六二四成）と、自己の著述一六種を集めた『景岳全書』六四巻（一六三六頃成）があり、後世の医家に用いられた。『類経』は日本で『黄帝内経』の普及と研究に大きな役割を果たした。[用薬51・70]

繆希雍『神農本草経』の重要な注釈『本草経疏』（一六二五）を著した。また『炮炙大法』（一六二二）は炮製を雷敩（五世紀）の説をもとに一七方に整理したもので後世に影響を与えた。

▼一六二五・寛永二年　明・馬蒔『皇帝内経霊枢註証発微』九巻〔梅寿〕

❖一六三〇・寛永七　貝原益軒、生まれる。

■一六三〇・寛永七　林羅山『多識篇』（古活字版）刊行。成立は慶長一七年（一六一二）、『本草綱目』から品名を抜き出し和訓を付けたもの。

▼一六三二・寛永九　元・孫允賢『（南北経験）医方大成論』一巻

『潜確類書』（明代）陳仁錫（一五七九～一六三四）による類書。[本草6／薬木19]

『農政全書』（崇禎一二・一六三九）徐光啓（一五六二～一六三三）著、六〇巻（一二部門）。中国歴代の農書文献約二五〇種をもとに農業技術を集大成したもので、賈思勰『斉民要術』（北魏）、王禎『農書』（一三一三）と合わせ中国三大農書の一つとされる。徐光啓はキリスト教信者で、宣教師マテオ・リッチから西洋の科学知識を翻訳などで紹介した科学者。[本草6]

堵胤昌（一六〇一～一六四九）　養生論を集め『達生録』を著す。[飲食13]

毛晋（一五九九～一六五九）　学者・蔵書家、叢書『津逮秘書』一五集を編纂。『陸璣詩疏広要』。[本草6]

『居家必備』（明末）　家庭での子弟教育の要を八項目に分け名賢の諸書から抄録して解説（著者未詳）。[本草6／用薬70]

『軒岐救正論』（明代）　蕭京著、六巻（医論、四診正法、薬性微蘊、治験医案、医鑑）。[用薬70／薬類17]

▼一六三七・寛永一四　明・利時珍『本草綱目』五二巻〔和刻初版本。野田弥次右衛門〕

〈1644〉

●清

■江戸

喩昌（喩嘉言）（一五八五～一六六四）　明末・清初の医家。『傷寒尚論篇』五巻（一六四八）は方有執『傷寒論条弁』を基礎に発揮を加えたもので、和刻があり（一六九六）、名古屋玄医『金匱要略註解』（一六九六）はこの書の影響を強く受けており、古方派勃興の端緒を開いた。また、各家の医案の中から自らの学術経験や会得していた独特の療法などを記した『寓意草』、難病の治療を論じた『医門法律』とともにこれら三書は、江戸中期に日本で翻刻され、医界に受容された。

▼一六四九・慶安二　明・堵胤昌『達生録』二巻〔上村次郎右衛門〕
▼一六五〇・慶安三　明・龔廷賢『(新刊)種杏仙方』四巻〔小島弥左衛門・田中庄兵衛〕
▼一六五一・慶安四　明・呉崑『医方考』六巻〔秋田屋平左衛門〕
▼一六五七・明暦三　元・李杲(李東垣)ほか『東垣十書』三二巻〔山本長兵衛〕
▼一六五七・明暦三　明・李中立『本草原始』一二巻〔丁字屋長兵衛〕
▼一六五八・万治元　元・孫允賢『医方大成論』一巻〔荒木利兵衛〕

■名古屋玄医(なごやげんい)(一六二八～一六九六)　古方派(『傷寒論』を聖典視)の始祖。経学・易学に通暁し『黄帝内経』以下中国医籍を読破、古典の重要性を説き、伊藤仁斎の古義学と通じるところがある。京都を中心に名士と交流、江戸中期の医学に強い影響を及ぼす。『医方問余』ほか著作多数。

■中村惕斎(なかむらてきさい)(一六二九～一七〇二)　儒者、程朱学派、京都の人で益軒と親交。伊藤仁斎と並び称された。主著『四書示蒙句解(ししょじもうくげ)』二七巻(元禄一四・一七〇一)、『訓蒙図彙(きんもうずい)』二〇巻(寛文六・一六六六)。【凡例10】

■稲生若水(いのうじゃくすい)(稲若水(とうじゃくすい))(一六五五～一七一五)　本草学者、儒医。『庶物類纂』三六二巻を脱稿して没した(のち門人が一千五四巻に増補)。『(新校正)本草綱目』(一七一四)は和刻最善本といわれる。【凡例10】

■後藤艮山(ごとうこんざん)(一六五九～一七三三)　古方派の祖とされるが、唐代医書にも重きを置き灸・熊胆・温泉などの効用も重視した。一気留滞説を提唱、門人は二百名を越え、香川修庵、山脇東洋らが排出した。門人の筆録『師説筆記』にその医論が伝わる。

▼一六六〇・万治三　明・李梴『医学入門』七巻〔秋田屋平左衛門〕

『本草洞詮(ほんぞうどうせん)』(一六六一)　沈穆(ちんぼく)著。【本草6／薬類9】

■一六六三・寛文三　黒川道祐『本朝医考』

▼一六六四・寛文四　明・劉純『玉機微義』五〇巻〔村上平楽寺〕

❖貝原益軒、このころまでに『本草綱目』を熟覧。

▼一六六八・寛文八　漢・張機『(宋版)傷寒論』一〇巻〔中川茂兵衛・上村次郎右衛門〕

李漁(りぎょ)(李笠翁(りりゅうおう))(一六一〇～一六八〇)　明末・清初の劇作家・小説家。日本の戯作者に影響を与えた。【飲食4】

▼一六六八・寛文八　漢・張機『仲景全書』一六巻〔秋田屋惣兵衛・上村次郎右衛門・聖済堂〕

柯琴(かきん)(柯韻伯(かいんぱく))(一七世紀～一八世紀前半頃)　清初の医家。『傷寒論注』(一六六九)は条文の排列を改めた。張仲景の原

■人見友元（竹洞）（一六三七～一六九六）　儒者、漢詩人。【元禄5】

■野必大（人見必大）（一六四二～一七〇一）『本朝食鑑』一二巻（元禄五成、同一〇年刊）は国産の食品四四二種を解説した食物本草書で、博物学書としても評価が高い。【凡例10】

■一六九二・元禄五　稲生若水『炮炙全書』貝原益軒序

■貝原好古『和爾雅』（一六九四）　益軒養子の好古が『爾雅』を模範に作成した漢語字引。

▼一六九四・元禄七　明・薛己『（彙輯）薛氏内科医案』七巻〔松葉清兵衛〕

▼一六九四・元禄七　明・李中梓『本草通玄』二巻〔西村市郎右衛門〕

▼一六九六・元禄九　清・喩昌『（喩嘉言先生）傷寒尚論全書』七巻〔博古堂・武村新兵衛〕

▼一六九六・元禄九　明・汪機『石山居士医案』八巻〔渋川清右衛門〕

■一六九七・元禄一〇　名古屋玄医『金匱要略註解』一一巻（一六九七・元禄一〇）　益軒・序、好古・跋。

▼一六九八・元禄一一　明・李中立『本草原始』一二巻〔栗山宇兵衛・林久次郎〕

▼一七〇四・宝永元　清・程応旄『傷寒論後条弁』一五巻〔博古堂・武村新兵衛〕

▼一七〇六・宝永三　明・呉崑『皇帝内経素問（呉注）』二四巻〔出雲寺和泉掾（朝廷専用の書肆二代目）〕

■香川修庵（一六八三～一七五五）　古法派。伊藤仁斎に古学を、後藤艮山に就き医学を研究。『傷寒論』を尊重するもあきたらず「我より古を作る」とまでいった。孔孟を崇拝し儒医一本論を唱えた。医学所・病論集『一本堂行余医言』がある。

■吉松東洞（一七〇二～一七七三）　古方派。張仲景の医方研究に傾注、山脇東洋に認められて大いに名声を博した。万病一毒説や天命説など中国伝統医学の基本理念に相反する考えは後学を魅了した。『薬徴』は『傷寒論』『金匱要略』中の主要薬物について両書の条文をからその薬能を帰納し考定したもの。

■山脇東洋（一七〇六～一七六二）　古方派。曲直瀬玄朔（後世方派）の門人だった養祖父・山脇玄心の院号・養寿院を襲ったが、後藤艮山に就き啓発され古医方を学んだ。『外台秘要方』を翻刻し幕府に献上、清国へも贈られた。また『蔵志』は日本の解剖図誌の嚆矢とされる。

▼一七二一・正徳元　魏・華佗『（新刻）華佗内照図』二巻〔升屋五郎右衛門〕

▼一七二一・正徳元　金・張従正（張子和）『儒門事親』一五巻〔田縁叔平・松下睡鶴堂〕

❖一七一三・正徳三　貝原益軒『養生訓』〔飲食1註〕

❖貝原益軒『大和本草』

一七〇八・宝永五　鶴原韜（つるはらおさむ）序、自序
一七〇九・宝永六　『大和本草』本編・一六巻刊
（一七一四年一〇月五日・正徳四年八月二七日　益軒没）
一七一五・正徳五　『大和本草』附録・諸品図刊

『大和本草』以降の主な漢方・本草・医史関係著作

▼一七一四・正徳四　明・李時珍『（新校正）本草綱目』五二巻（稲生若水・校訂）〔唐本屋八郎兵衛〕
■一七一五・正徳五　『庶物類纂（しょぶつるいさん）』三五二巻（未完）成る、稲生若水（一六五五～一七一五）
▼一七二二・享保七　元・孫允賢『医方大成論』一巻〔万屋清兵衛〕
▼一七二三・享保八　明・方有執『傷寒論条弁』八巻〔平野屋佐兵衛・武村新兵衛〕
▼一七二六・享保一一　清・汪昂『医方集解』三巻〔吉野屋博文堂〕
■一七二六・享保一一　『用薬須知（ようやくすち）正編』五巻、松岡玄達（まつおかげんたつ）（恕庵（じょあん））（一六六八～一七四六）
▼一七二八・享保一三　清・汪昂『（増訂）本草備要』二巻〔林喜兵衛・木村吉右衛門〕
■一七三八・元文三　『庶物類纂（しょぶつるいさん）』（後編一七三八・続修一七四七）丹羽正伯（にわしょうはく）（一七〇〇～一七五二）
▼一七四六・延享三　唐・王燾『外台秘要方（げだいひようほう）』四〇巻〔養寿院（山脇東洋）〕
■一七五八・宝暦八（自序）　『蔵志（ぞうし）』二巻、山脇東洋（一七〇五～一七六二）古方派
■一七六四・明和元　『吐法編（とほうへん）』荻野元凱（おぎのげんがい）（一七三七～一八〇六）古方派
■一七六六・明和三　『医官玄稿（いかんげんこう）』望月三英（もちづきさんえい）（一六九七～一七六九）折衷派
■一七七九・安永八　『師説筆記（しせつひっき）（写本）』後藤艮山（一六五九～一七三三）古方派
■一七七九・安永七　『牛山活套（ぎゅうざんかっとう）』三巻、香月牛山（かつきぎゅうざん）（一六五六～一七四〇）後世派
■一七八一・寛政三　『療治茶談（りょうじさだん）』九冊、津田玄仙（つだげんせん）（一七三七～一八〇九）後世派

索 引

1. 「書名」「人名」「地名」「事項」の 4 種を作成し、「事項」には、薬名・本草・漢方その他の用語を採録した。
2. 本文（第 1 ～ 6 章、まとめ・補論・結び）と附編を対象とし、一部他から補った。ただし、貝原益軒、『本草綱目』、『神農本草経』は採録の対象としていない。
3. 記号はつぎを意味する。
   - / 附編二「中日医薬学・漢方比較年表」中のページを「/」のあとに記す。
   - * 註に記述があることを示す。
   - # 見出し項目にあることを示す。

書名

あ 行

蘗苑詳註 いえんしょうちゅう 79 / 372
医学入門 いがくにゅうもん 79, 80, 94, 95, 101, 108, 109, 110, 112, 113, 115, 116, 130, 155, 159, 180, 185, 304 / 373, 378
医経小学 いけいしょうがく 99 / 370
医書大全 いしょたいぜん 80, 154, 192, 204, 242 / 369, 371, 372
医心方 いしんぼう 37 / 365
医説 いせつ 177 / 368
飲膳正要 いんぜんせいよう 67 / 369
易経 えききょう 57, 170*, 327 / 359
益部方物略記 えきぶほうぶつりゃっき 79 / 365
淮南子 えなんじ 76, 221, 288 / 360
延喜式 えんぎしき 66, 198, 249, 267 / 363, 364
園史 えんし 80, 270 / 374

か 行

海棠譜 かいどうふ 82 / 368
蟹譜 かいふ 82 / 366
開宝重定本草 かいほうじゅうていほんぞう 364
開宝新詳定本草 かいほうしんしょうていほんぞう 364
開宝本草（開宝）かいほうほんぞう 24, 101, 106, 259*, 298* / 362, 364
海味索隠 かいみさくいん 79 / 375
下学集 かがくしゅう 66 / 371
花鏡 かきょう 79, 80, 203 / 379
花史左篇 かしさへん 79 / 376
瓜蔬疏 かしょそ 79, 82 / 373
花疏 かそ 79 / 373
果疏 かそ 79 / 373
活人（書） →南陽活人書
花譜（允齋）かふ 79

［著者紹介］　矢嶋道文　やじま・みちふみ

1948 年　岡山県玉野市に生まれる
1977 年　関東学院大学大学院経済学研究科（博士課程）単位取得
1992 年　関東学院女子短期大学教授
（この間、関東学院大学、筑波大学、高崎経済大学非常勤講師）
2001 年　博士（経済学）
2002 年　関東学院大学文学部教授
2004 年　関東学院大学空手道部副部長
2007 年　一般社団法人日本漢方協会入会（現在に至る）
2010 年　関東学院大学空手道部部長
2016 年　神奈川陸上競技協会 80 周年記念功労者表彰
2018 年　日本漢方協会「第 38 回漢方学術大会」特別講演（貝原益軒『大和本草』に学ぶ）
2019 年　関東学院大学名誉教授
2023 年　公益社団法人日本空手協会精励賞受賞
2024 年　第 68 回「湯島聖堂 神農祭」講演（貝原益軒『大和本草』の漢方を読む 理論と実践）

〈その他活動〉
葉山町社会教育委員　葉山町小中学校学校運営委員　葉山町民大学コーディネーター

〈現在〉
一般社団法人日本漢方協会認定漢方相談師
公益社団法人日本空手協会 4 段
関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員（坂田研究グループ）
関東学院大学空手道部 OB 会（関空会）参与
関東学院大学体育部 OB・OG 会特別顧問
葉山郷土史研究会会長
三浦郡陸上競技協会副会長（葉山陸上クラブ代表）

〈主要著書〉
『近世日本の「重商主義」思想研究　貿易思想と農政』御茶の水書房、2003 年（平成 14 年度科学研費補助金「研究成果公開促進費」交付書）
『互恵（レシプロシティー）と国際交流　キーワードで読み解く〈社会・経済・文化史〉』（編集責任）クロスカルチャー出版、2014 年
『有徳論の国際比較　日本とイギリス』（編著）クロスカルチャー出版、2019 年（平成 31 年度「関東学院大学人文科学研究所出版助成金」交付書）